スポーツニッポン　2019年3月23日　掲載

日本ポニーベースボール協会理事長就任から1年 広澤克実氏 魅力を語る

元プロ野球選手・コーチ

ポニーは子どもが主役、我々はサポート役

ポニーリーグについて熱く語る日本ポニーベースボール協会・広澤克実理事長

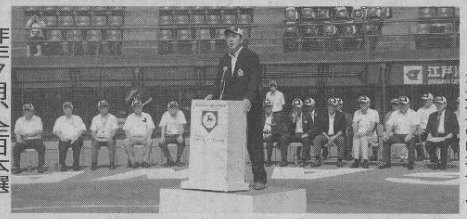
「野球は試合に出て覚え成長させる」 誰もが出場できる

機会均等主義

小・中学生の硬式野球リーグ、ポニーリーグは「野球は試合に出て覚える」という機会均等主義を掲げ、社会に役立つ未来の人材の育成を目的としている。米国発祥の世界的組織で、現在国内約130チーム、約2000人がプレー。子どもの野球離れが進む中、昨年までの過去7年で約550人増など拡大を続けている。今年度からは中学生の野球リーグ初となる球数制限も導入し「壊さず育てる」意識も徹底。日本ポニーベースボール協会理事長を務める元プロ野球選手・コーチで本紙野球評論家の広澤克実氏(56)に魅力や取り組みを聞いた。

新理事長就任から1年。広澤理事長はポニーリーグの使命について「子どもたちは国の宝。社会に役立つ人材に育ってほしい。野球を通じて育成のお役に立ちたい。ポニーにおいては子どもが主役。我々はサポート役」と力説する。

リーグ最大の魅力について「野球は試合に出て覚えるという機会均等主義。子どもたちも楽しそう」と目を細める。「最近は野球を辞めたという人の話もよく聞くが、理由は試合に出られずつまらない、と。ポニーは全員試合に出てもらう。試合の緊張感が子どもを成長させる。緊張の中で失敗するのもいい経験。どんどん野球をやって成功、失敗を重ねてほしい」と訴える。



昨年7月、全日本選手権大会であいさつする広澤理事長

子どもたちの肘や肩、将来性を守る "壊さず育てる"意識

球数制限導入

「"壊さず育てる"意識も徹底する」と語る。

今季から世界大会につながる試合には米大リーグ機構と米国野球連盟が制定した18歳以下のアマチュア投手を対象にした球数制限のガイドライン「ピッチ・スマート」を採用。全日本選手権ブロンコの部では従来の「1日最大7回、2日合計10回」のイニング制限に加え、「1日85球」の球数制限を課す。「子どもたちの肘や肩、将来性を守るためにも投球制限はつけなくてはいけないと考えた」と説明する。

タイブレークも導入済み。人材育成にも波及するあいさつ、攻守交替の全力疾走も徹底、昨年度の全国大会平均試合時間は1時間44分だった。

国内リーグは「ブロンコ」(小学校高学年、中学1年)、「ポニー」(中学2、3年)、「コルト」(中学3年)と細かく分かれ、1チームは12人から登録可能。1団体から複数チームの出場、他団体との合同チームも認めている。主な大会はリーグ戦形式で行う。スタメン再出場のリエントリー制度もある。試合が多く、誰もが出場できる工夫がなされている。

昨年9月、関東連盟秋季大会で身振りを交え指導者講習会をする広澤理事長

マエケンや大谷らメジャーリーガーとの懇談計画 国際的視野を養う

海外交流盛ん

国際大会や親善試合で世界と交流し、国際的視野を養うこともできる。日本代表としてアジアチャンピオンシップを勝ち上がればワールドシリーズに出場できる。海外遠征の個人負担額は3万5000円に統一。「僕の時代にポニーがあったら入りたかった。世界を経験してメジャーで活躍した石井一久楽天GM(北千葉ポニー出身)のようになってもらうのも結構だが、ならなくても日本のために一生懸命働いてくれる人に」と期待を寄せる。

今夏の日米親善交流大会はホームステイしながら米ピッツバーグなどを巡り、ドジャースやエンゼルスの本拠地で試合観戦。練習見学時には前田健太(30)や大谷翔平(24)らメジャーリーガーとの懇談も計画している。

広澤理事長は「今後も仲間を増やしていきたい。我々の理念、子どもたちの考え方に共鳴してくださるチームの方、ぜひ一緒に子どもの成長を見守りましょう」と呼びかけ、子どもたちには「ぜひポニーリーグで試合に出て、入って良かったと思ってもらえたら」と思いを込めた。

奨学金制度や留学制度も

○…ポニーリーグでは、2年以上の在籍経験者を対象とした奨学金制度や留学制度も設けている。給付型の奨学金制度は全世界を8地域に分け地域から1人奨学生を推薦できるというもの。留学制度では留学先にポニーリーグのチームがあることが条件となり、ホームステイもポニーリーグのファミリーがサポートするという。日本からも過去2人が留学制度を利用、海外で野球と学業を両立した。